甲虫インベントリーの巨匠，平野幸彦氏の思い出

野村周平
国立科学博物館動物研究部（nomura@kahaku.go.jp）

Memories of the Late Mr. Yukihiko Hirano, an Authority of Beetle Inventory

Shûhei Nomura

去る 7 月 22 日，神奈川県相模原市の博物館にお勤めであった守屋博文氏からお便りがあり，小田原の平野幸彦氏が逝去されたことを知った．守屋氏からのお知らせでは，平野氏は 6 月 11 日午前 10 時 5 分自宅にて，多発性骨髄腫にてご逝去されたとのことであった．享年 85 歳，6 月 15 日に小田原市斎場で火葬．生前からのご遺志で，亡くなったことは 1 か月ほど伏せておくようにということで，約 1 か月たったことから，お知らせくださったとのことであった．

平野さんの甲虫学界における業績は，なかなか一口に説明することはできないが，いくつかここで振り返ってみたい．平野さんの研究の中心にあったのは，神奈川県の甲虫相であった．現在の言葉では「甲虫インベントリー」ということになろうかと思う．甲虫に限らず，地域の昆虫相の解明については，やっと今世紀になってからその重要性が認識されるようになり，「インベントリー」という言葉を与えられ，しかし今に至っても，それは地域の好事家の仕事であるとして学術界での評価は低い．しかしその「インベントリー」という言葉が登場するはるか以前から，平野さんの仕事は，燦然と輝きを放っていた．日本各地で地域甲虫相の解明を目指す研究者のお手本であり，目標であった．その仕事は「神奈川県昆虫誌」（平野，2004）の第 2 巻甲虫編に結実したといえよう．主には神奈川県の甲虫相解明に尽くされた平野氏であったが，決して神奈川県に限定した仕事をされたばかりではなく，「トムラウシの甲虫目」（平野，2017）も平野氏が熱心に取り組まれた仕事の一つであった．一時は毎年のようにトムラウシ温泉を訪れて，採集を行っておられたようである．

皇居から採集された甲虫の同定などで，平野さんには様々な面で多大なご援助をいただいた（野村ら，2001 など）．しかしその中で一つ，非常に印象的なできごとがあったので，ここで記しておきたい．豊橋市立自然史博物館で開催された，2012 年の甲虫学会での「雑甲虫分科会」で，平野さんが，北海道の複数地点から採集されたヒゲブトコメツキ科の一種（当時日本未記録のカギツメヒゲブトコメツキ）を紹介された．その♂の中脚跗節があまりに変った形状を示していて，「これは一体何だ！」というような異様な形質だった．そしてそれを紹介した平野さんのプレゼンのタイトルがまさに「これは一体何だ！」だったのである．しかし実体顕微鏡の写真では，詳細がよくわからなかった．なので，電子顕微鏡で撮影したいと思い，豊橋からの帰りの新幹線で同席した平野さんに懇願して，このカギツメヒゲブトコメツキの標本をお借りした．それでつくばの科博に置かれた電子顕微鏡を使って写真を撮影し，さやばねニューシリーズに投稿した（野村・平野，2014）．

2010 年頃の平野氏．撮影場所不明．

そのようなかかわりもあり，様々な点で研究面でのよりどころとさせていただいていたが，去る 2018 年 12 月 23 日，この日は東京例会の翌日であったが，亀澤さんと，甲虫学会の学会賞（功労賞）を届けに，小田原のご自宅へお邪魔した．この時にはすでに平野さんは病床を離れることができず，ベッドそばから功労賞の盾をお渡しすることになった．しかしその時でも，やり取りはしっかりできていた．お疲れになってはよくないので，短時間で辞去したが，それが最後の邂逅となった．その時の写真も亀澤さんからもらっているが，ここではお元気なころのお姿を掲げておきたい．平野さんの多大な甲虫学への貢献をたたえ，長年にわたるご厚誼に厚く感謝するとともに，ご冥福をお祈りする．願わくば，日本各地の甲虫インベン

トリーの作成と平野さんの仕事が，昆虫学界においても，一般社会においても，もっと正当な，高い評価を得ることを期待したい．

引用文献

平野幸彦 , 2004. コウチュウ目 Coleoptera, 神奈川県昆虫誌 , Vol. II, pp. 335–835.

平野幸彦 , 2017. トムラウシの甲虫目 . 神奈川虫報 , (194) : 86 pp.

野村周平・平野幸彦 , 2014. これは一体何だ？！—カギツメヒゲブトコメツキ（ヒゲブトコメツキ科）中脚付節の走査型電子顕微鏡による観察—. さやばねニューシリーズ , (13) : 17–20.

野村周平・平野幸彦・斉藤明子・上野俊一・渡辺泰明，2000. 皇居の甲虫相．国立科学博物館専報 , (36) : 185–255.

平野さんを偲ぶ

高橋和弘

〒 259–1217　平塚市長持 239–11

平野さんと初めて会ったのは，確か神奈川昆虫談話会の例会の席上だったと記憶している．その席上で，たまたま大学の後輩であることがわかり，以後，甲虫関係以外に大学の後輩という立場でも親しくお付き合いさせていただいてきた．

平野さんとの思い出はたくさんあるが，一番印象に残っているは，その年齢に見合わない体力である．もう 20 年以上も前になるが，丹沢大山の調査を平野さんらと引き受けたことがあった．丹沢はさほどの標高が高い山ではないが，行かれた方はよくご存じのとおり，実際に登るとなると，途中の坂がきつくかなりしんどい登山となる．当時の若手？を中心に数名のメンバーで登山を開始した．平野さんは，恐らくその中で最年長であったと思われる．にもかかわらず，多くのメンバーが丹沢山から蛭ヶ岳への経路でへばってしまう中で，最後まで平然と歩かれていたことにはまったく驚かされた．さらに，蛭ヶ岳山頂に着いた後でも，疲れて小屋で休憩をとっているメンバーを尻目に，すぐに，一人で周辺の採集に出かけられ，朽ち木を叩いて採集している音が周囲から間断なく聞こえてきた．当然，採集品の成果にもはっきりと差がついたことは，言うまでもない．このように，採集のうまさはもちろんであるが，体力に関しても年齢をはるかに超えた大変優れた方であった．

もう一つ記憶に強く残っているは，虫寿のことである．虫寿とは，平野さんが提唱された虫屋に向けた賀の祝いのことで，虫にちなんで 64 歳の誕生日を祝う行事である．何かの席上で，平野さんが「そろそろ 64 歳の虫寿をむかえる」とおっしゃったことから，この言葉が知られることとなり，さらに，神奈川昆虫談話会の有志が中心となって，祝賀行事に取り組むことになった．行事は，遠く名古屋から故佐藤正孝さんが駆け付けるなど，盛大な宴会で行われ，大変華やかなものであった．その中で，私は記念誌の編集という大役を仰せつかったが，これが実に大変な作業であった．発行日が祝賀会当日と決められており，厳しい締切日が設定されてはいたのだが，祝賀原稿のうち特に大御所の先生の皆さんの入稿が全般に遅れ気味で，最後に届いた原稿は，印刷屋から示されたデッドラインの前日という有様で，届いたばかりのファックスからワープロで必死になって印刷原稿を起こ